

武蔵野音楽大学

音楽総合学科 アートマネジメントコース

年間活動報告書 2025



*Annual Report of
the Department of Arts Management, Faculty of Music,
Musashino Academia Musicae
April 2025- March 2026*

目次

『年間活動報告書』2025 刊行に寄せて.....	1
1. 2025 年度 アートマネジメントコースの主な年間活動記録.....	2
2. 2025 年度 アートマネジメントコース専門科目一覧.....	2
3. 2024 年度 「アートマネジメント研究」各科目.....	3
■「アートマネジメント研究（基礎）Ⅰ・Ⅱ」.....	3
■「アートマネジメント研究（応用）Ⅰ・Ⅱ」.....	3
■「アートマネジメント研究（応用）Ⅲ・Ⅳ」.....	4
■「アートマネジメント研究（応用）Ⅴ・Ⅵ」.....	4
■2025 年度 卒業論文題目一覧.....	5
■2025 年度 卒業研究発表会.....	6
4. 2025 年度 実習活動.....	7
1) 「アートマネジメント実習 Ⅰ・Ⅱ」.....	7
2) 「アートマネジメント実習Ⅲ」.....	10
3) 芸術文化施設見学実習.....	11
5.各科目からの報告.....	23
「企画制作演習 Ⅰ・Ⅱ」.....	23
「舞台技術概論Ⅰ・Ⅱ」.....	26
「広報宣伝資料製作」.....	27
「劇場音響概論 Ⅰ・Ⅱ」.....	29
「芸術文化政策論Ⅰ・Ⅱ」.....	32
「コンピュータ音楽実習Ⅰ、Ⅱ」.....	33
「演劇論・演出論」.....	36
「舞踊概論Ⅰ・Ⅱ」.....	37
6. その他.....	38
FD活動.....	38

凡例：

- ・本報告書は、音楽総合学科アートマネジメントコースの授業、実習、その他の活動を紹介するものである。
- ・本報告書で記載されている教員の役職名、学生の年次などは、すべて 2025 年度時点のものである。
- ・特定の執筆者名が記載されていないテキストは、本号編集担当者が作成したものである。

『年間活動報告書』2025 刊行に寄せて

アートマネジメントコース 赤木 舞

本報告書は、私たちアートマネジメントコースの教員が日々の教育・研究活動を振り返る手がかりとして、また、本コースを支えてくださる皆様に教育・実践活動の現状を報告するために刊行するものです。授業、インターンシップ、学生による企画制作公演、地域プロジェクトなど、多様な実践を通して、本コースは今年度も多くの成果を積み重ねることができました。これらの活動にご協力くださった皆様に、心より御礼申し上げます。

一方で、本年度は私たちにとって大きな悲しみを経験した年でもありました。長年にわたり本コースの発展に尽力され、コース長として教育と実践の双方を牽引してこられた上村英郷先生が、2025 年 12 月に急逝されました。上村先生は、常に学生に寄り添い、芸術文化と社会を繋ぐ実践的な学びの場を築いてこられました。本報告書に収められている学生たちの活動記録の一つ一つは、上村先生の温かいご指導の賜物であり、これまで築いてこられた学びの土壌の上に成り立っています。ここにあらためて深い感謝と哀悼の意を表するとともに、その志を今後の教育活動へと受け継いでいく所存であります。

2025 年度は、前年度に引き続いて「芸術文化施設見学実習」を実施できたことが、大きな成果となりました。1泊2日の日程で実施した今回の見学実習は、新潟市のりゅーとぴあ（新潟市民芸術文化会館）、群馬県の草津音楽の森国際コンサートホール、そして原美術館 ARC を訪問しました。職員の方によるレクチャーやコンサート鑑賞、美術館所蔵庫の見学など、学内では得ることのできない非常に貴重な学びの体験となりました。実地での見学は、事前学習や事後のレポートと組み合わせることで、全学年の学生の学びに深い影響を与え、授業外での学習体験として重要な役割を果たしています。

また、大学全体として留学生が増加傾向にありますが、本コースにおいても中国からの留学生が年々増えています。アートマネジメントにおいて重要とされる国際交流や異文化交流の観点からも、学生が互いの文化に刺激をうけ共に学ぶ環境の創出は、本コースの発展につながることを期待できます。

皆様には、引き続きアートマネジメントコースへのご指導、ご助言を賜りますようお願い申し上げます。

1. 2025 年度 アートマネジメントコースの主な年間活動記録

2025 年	
4 月 1 日	入学式
4 月 7 日	前期授業開始日
6 月 21 日～6 月 22 日	芸術文化施設見学実習
7 月 21 日	前期授業終了日
8 月 6 日～9 月 18 日	夏季休暇
9 月 19 日	後期授業開始日
10 月 31 日～11 月 2 日	ミューズフェスフェスティバル
12 月 5 日	「企画制作演習」公演（ブラームスホール）
12 月 20 日～1 月 4 日	冬季休暇
2026 年	
1 月 5 日	クラス授業・レッスン再開
1 月 19 日	卒業論文提出日
1 月 19 日	後期授業終了日
2 月 12 日	卒業研究発表会
3 月 15 日	令和 6 年度卒業式
3 月 22 日	3 コース合同卒業研究発表会（ブラームスホール）

2. 2025 年度 アートマネジメントコース専門科目一覧

科目	履修年次	担当教員
アートマネジメント研究（基礎）Ⅰ・Ⅱ	1 年	上村 英郷、赤木 舞、久保 仁志
アートマネジメント研究（応用）Ⅰ・Ⅱ	2 年	上村 英郷、赤木 舞
アートマネジメント研究（応用）Ⅲ・Ⅳ	3 年	上村 英郷、赤木 舞
アートマネジメント研究（応用）Ⅴ・Ⅵ	4 年	上村 英郷、赤木 舞、中川 俊宏、久保 仁志
アートマネジメント実習 Ⅰ・Ⅱ	2 年	赤木 舞
アートマネジメント実習 Ⅲ	3・4 年	赤木 舞
企画制作演習Ⅰ・Ⅱ	4 年	赤木 舞、中川 俊宏
舞台技術概論Ⅰ・Ⅱ	2 年	西田 俊郎
広報宣伝資料製作	2 年	松永 路
劇場音響概論Ⅰ・Ⅱ	3 年	百合山真人、松宮辰太郎
芸術文化政策論Ⅰ・Ⅱ	3 年	赤木 舞
コンピュータ音楽実習Ⅰ・Ⅱ	3 年	安田 寿之
演劇論・演出論	4 年	酒井 美恵
舞踊概論Ⅰ・Ⅱ	4 年	阿部 さとみ、稲田 奈緒美

3. 2024 年度「アートマネジメント研究」各科目

■「アートマネジメント研究（基礎）Ⅰ・Ⅱ」

授業概要:

今年度は、対面での授業を前期・後期ともに各 15 回の授業を実施した。授業は〈芸術文化環境概論〉を副題とし、芸術や文化の概念、音楽、演劇、舞踊、伝統芸能、大衆芸能などの舞台芸術分野や美術分野の状況、関連施設や団体の状況など、現代の芸術文化を取り巻く環境について講義を行った。Ⅰ・Ⅱを通して、日本の芸術文化全般の現状を理解し、芸術文化を取り巻く環境に対する理解を深め、アートマネジメントを学ぶ基盤を築くことを目指した。

担当教員:

上村英郷、久保仁志、赤木舞の 3 名が担当した。主に赤木が各舞台芸術分野、久保が芸術全般と美術関係、上村が音楽分野を担当した。

授業形式:

アクティブ・ラーニングの一環として、毎回の授業の冒頭に公演見学レポートの発表を行った。クラシック音楽コンサートや未経験のジャンルの公演など、多様なレポート課題が設定された。

評価方法:

前期・後期ともに Google フォームを用いたオンライン試験を行った。持ち込み可で時間内に解答する方式を採用し、語句の説明を求める問題などを出題した。試験結果は各教員が採点し、授業への取り組み姿勢なども考慮して最終的な評価が行われた。

(赤木)

■「アートマネジメント研究（応用）Ⅰ・Ⅱ」

授業概要:

今年度は、1 年間を通して対面で前期と後期それぞれに 15 回の授業を行った。授業内容は、「舞台芸術運営論」を副題とし、音楽をはじめとする舞台芸術公演の企画、予算管理、交渉、権利処理、契約、発注、宣伝、営業、事後処理などの制作業務全般に焦点を当てている。演奏会を中心に、企画立案から公演終了までの業務の流れを学び、音楽以外の舞台芸術全般についても、制作サイドからの視点で理解を深めた。

担当教員:

赤木舞と上村英郷の 2 名が担当した。主に赤木が各芸術各分野、上村が音楽分野を担当した。

授業形式:

アクティブ・ラーニングの一環として、毎回の授業の冒頭に公演見学レポートのプレゼンテーションを行った。また、学期末には企画書の作成とプレゼンテーションを行い、質疑応答や意見交換を行った。

評価方法:

学期末に発表した企画書のコンセプト、具体的な内容の整合性や充実度、授業への取り組み姿勢などが評価の対象となり、教員間で協議の上で採点した。各学生には教員からフィードバックが行われた。

(赤木)

■「アートマネジメント研究（応用）Ⅲ・Ⅳ」

授業概要:

今年度は対面での授業を行い、前期・後期ともに各 15 回の授業を実施した。授業は〈地域文化振興論・マーケティング論〉を副題とし、文化政策、文化施設、文化遺産、教育、民間支援、普及などの視点から芸術文化と地域活性化の問題に焦点を当てている。また、マーケティング理論も取り上げ、芸術文化と市場の関係性について学ぶ。前期・後期を通して、芸術文化と地域社会の関係を探究し、芸術文化の経済的側面にも触れることを目指す。

担当教員:

赤木舞と上村英郷の 2 名が担当した。主に赤木が芸術各分野、上村がマーケティング関連を担当した。

授業形式:

アクティブ・ラーニングの一環として、毎回の授業の冒頭に新聞記事やインターネット上で報じられた芸術文化関連ニュースのレポートを学生が発表した。学生たちが注目したニュースが共有され、質疑応答や意見交換が行われた。

課題と評価方法:

Ⅲ（前期）・Ⅳ（後期）では、各学生が 1 つの施設や団体を対象に研究を行った。前期末に概要調査レポートを提出し、後期には研究を深めて研究成果をまとめ、プレゼンテーションとレポート提出を行った。成績は研究内容の充実度や授業への取組み姿勢を考慮して評価された。後期に提出された研究レポートには教員からのフィードバックとともに、卒業研究に向けたアドバイスも提供された。

（赤木）

■「アートマネジメント研究（応用）Ⅴ・Ⅵ」

「卒業論文」

授業概要:

「アートマネジメント研究（応用）Ⅴ・Ⅵ」は、芸術文化活動全般からテーマを選び、担当教員の個別指導のもとで研究計画を策定し、調査・分析・発表を行う卒業研究である。一方、「卒業論文」は、その卒業研究の成果を論文としてまとめるものであり、芸術文化の社会における位置づけについて深く考察していく能力を身につけることを目指している。

授業形態:

授業形態は、クラス全体での講義と、担当教員ごとの個別指導とに分かれる。クラス全体での講義では、年度初めに論文執筆の基礎的な知識を提供し、発表や意見交換を行った。後半では個別指導に移行し、学生はそれぞれの研究計画を進めた。

担当教員:

上村英郷、中川俊宏、久保仁志、赤木舞の合わせて 4 名が指導に当たった。各教員が学生の研究テーマを参考に指導し、教員ごとに分散しての個別指導が行われた。

卒業論文提出日:

「卒業論文」の提出日は、今年度は 1 月 19 日に設定され、7 名全員が遅滞なく提出した。

評価方法:

「アートマネジメント研究（応用）Ⅴ・Ⅵ」の成績は、前期・後期ともに担当教員が主に評価し、「卒業論文」については、4 名の教員が採点と協議を行い評価した。

（赤木）

■2025 年度 卒業論文題目一覧

論文題目	執筆者	学籍番号
地域で活動する子ども演劇・ミュージカル団体の在り方に関する考察 －公的組織が運営する団体に着目して－	今川 知彩	2227-001
音楽心理学によるミュージカル演出の分析と考察 ー宝塚歌劇を中心にー	川村 桃加	2227-002
制度に基づくアート・音楽イベントが都市空間とまちづくりに与える影響 ー東京都・京都府・北海道の事例比較を通してー	坂井 りずむ	2227-003
アングラ演劇の現状と今後の展望	吉田 百花	2227-004
温泉地と芸術祭の関係性を通じた地域振興の考察 -中之条ビエンナーレと渋川アトリラを事例として-	生越 一希	2227-005
TikTok ライブ配信における視聴者参加型コンテンツの影響	大塚 音和	2227-006
新選組関連のイベントにおける事業内容と市民参加に関する考察 ーひの新選組まつりを対象にー	加藤 花	2227-007

■2025 年度 卒業研究発表会

以下のように卒業研究の発表を行った。

《コース内卒業研究発表会》

日 時：2月12日（木）13：00～14：00

場 所：S502室

発表者：今川知彩・生越一希



《3 コース合同卒業研究発表会》

日 時：3月22日（日）

場 所：ブラームスホール

発表者：坂井 りずむ

備 考：オープンキャンパスにおけるコース紹介の一環として、
作曲コース、音楽学コース、音楽教育コースとともに合同で研究発表を行った。



4. 2025 年度 実習活動

舞台芸術のマネジメント人材の育成は、現場での実践から学ぶ要素が非常に多いという特性を持っている。確かに、講義によって得られる知識や情報は重要だが、教室外での経験もまた貴重なものである。これら両者はお互いに補完し合い、学びの効果を高めるものとなる。以下は、学生たちが実際に体験しながらアートマネジメントを学んださまざまな実習の報告である。

なお、「コンピュータ音楽実習Ⅰ・Ⅱ」「舞台技術概論Ⅰ・Ⅱ」「劇場音響概論Ⅰ・Ⅱ」「広報宣伝資料製作」「演劇論・演出論」などの科目にも実習的な活動が含まれているが、それらの科目に関する報告は「各科目からの報告」欄にまとめて掲載している。

(赤木)

1) 「アートマネジメント実習Ⅰ・Ⅱ」

◆授業概要

大学主催の公演を中心に、スタッフとして参加し、コンサートホールにおける公演運営について実践的に学ぶ科目である。公演は、オーケストラ等による大規模公演から小規模の学生演奏会（「学生による演奏会」等）まで多種多様で、学内のホールのみならず、東京芸術劇場や東京オペラシティ等でも実習を体験している。

大規模公演における実習内容は、受付業務、チケットもぎり、teket の読み込み、花束受付、会場案内等であった。「学生による演奏会」では、舞台転換、司会、受付業務等の当日運営に加え、今年度からチラシとポスター作成も担当した。学生が主体的に運営することにより、学生同士でアイデアを出し合って効率のよい運営を目指すことや、チームワークの重要性を体感した。

また、昨年度に引き続き「江古田キャンパスプロジェクト」に参加し、武蔵大学、日本大学芸術学部の学生とともに、10 月と 12 月に実施した街づくりイベントの企画運営に参加した（10 月のイベントは雨天により中止となった）。

2025 年度に実施した実習は以下のとおりである。

(赤木)

開催日	会場	内 容
5月10日(土)	ベートーヴェンホール	オハイオ州立大学ウィンド・シンフォニー演奏会
5月23日(金)	ウィンドアンサンブルホール	学生による演奏会 vol.48
6月12日(木)	ブラームスホール	ニュー・ストリーム・コンサート 55
6月13日(金)	ブラームスホール	ニュー・ストリーム・コンサート 56
6月24日(火)	ウィンドアンサンブルホール	学生による演奏会 vol.49
6月27日(金)	ベートーヴェンホール	ケマル・ゲキチ ピアノ・リサイタル
7月3日(水)	ブラームスホール	坂東玉三郎特別招聘教授公開講座
7月15日(火)	東京オペラシティホール	ウィンドアンサンブル演奏会（指揮：テリー・オースティン）
9月26日(金)	東京芸術劇場	管弦楽団演奏会（指揮：北原幸男）
9月30日(火)	ベートーヴェンホール	大西宇宙バリトン・リサイタル
10月5日(土)	ベートーヴェンホール	陸上自衛隊中央音楽隊ウィンド
10月8日(水)	ウィンドアンサンブルホール	学生による演奏会 vol.50
10月13日(月祝)	ブラームスホール	木林理絵ピアノリサイタル
10月17日(金)	ブラームスホール	ミーシャ・ダチッチ ピアノリサイタル
11月10日(月)	オーケストラホール	学生による演奏会 vol.51
11月20日(木)	トッパンホール	ニュー・ストリーム・コンサート 57
11月27日(木)	東京オペラシティホール	管弦楽団演奏会
12月2日(火)	ベートーヴェンホール	室内合唱団演奏会
12月5日(金)	ブラームスホール	アートマネジメントコース企画制作公演
12月15日(月)	東京芸術劇場	ウィンドアンサンブル演奏会（指揮：飯盛範親）
12月16日(火)	ウィンドアンサンブルホール	学生による演奏会 vol.52
12月22日(日)	日本大学芸術学部キャンパス	江古田キャンパスプロジェクト「クリスマスコンサート」



「学生による演奏会」のチラシ

《ミューズ・フェスティバル》

ミューズ・フェスティバルは本学の学園祭であり、授業ではないが、本コースでは音楽環境運営学科の創設時以来、学科・コースの紹介などの企画をもって参加してきた。近年は、2年生の「アートマネジメント実習Ⅰ・Ⅱ」の一環として取り組んでおり、今年度も同様に2年生が担当した。

昨年に引き続き展示のポスターとパンフレットを作成し、アートマネジメントコースの紹介と共に、「広報宣伝資料製作」の授業内に履修学生が作成した作品（架空の公演のチラシ）を展示し、過去の履修者の作品も含めて紹介する展示を企画した。また、身近な素材で打楽器をつくる「楽器づくりのワークショップ」や、照明体験コーナーなど、音楽に関連する体験をしてもらうコーナーを企画し、来場者とのコミュニケーションも積極的に行っていた。

さらに、展示会場では4年生の「企画制作演習」公演の宣伝コーナーを設け、企画制作公演の紹介及び、今年度の企画制作公演の宣伝を行った。今年度の公演のチラシ配布とポスターを展示するとともに、過去4年分の公演のチラシとプログラムを展示し、これまでの公演のダイジェスト映像をスクリーンに映して実際の公演模様を見られるようにした。

開催終了後には実施記録を総括し「ミューズフェスティバル報告書2025」としてまとめられた。

ミューズ・フェスティバルは学生の祭典であり、企画立案や催事運営については学生たちの自発性や自主性を重視している。基本的には学年代表を中心に学生同士での相談で進め、担当教員は側面的にサポートする役割を果たした。

(赤木)



アートマネジメントコースポスター



ミューズフェスティバル会場の模様

2)「アートマネジメント実習Ⅲ」

◆授業概要

3年次ないしは4年次で履修する必修科目で、学外の文化施設、芸術団体、文化関連団体等におけるインターンシップである。学生自らが実習先を探し、実習受け入れのお願いをすることになっている。実習内容は本人の希望に基づき、先方とご相談させていただいている。実習中は毎日「実習日誌」に業務内容や指導を受けた事項を記入し、実習終了後は実習先のご担当者に所見と成績評価をいただいている。

今年度は、一覧のとおり3年生8名がインターンシップを行うことができた。きめ細やかにご指導いただいた各施設・団体の皆様には心より感謝申し上げるしだいである。

(赤木)

〈実習先及び主な実習内容一覧〉

実習生氏名	実習期間	日数	実習先(機関・施設)	主な実習内容
上田 連也	6月12日 ～ 11月9日	10日	東京佼成ウィンドオーケストラ	公演運営業務
酒井 千妃呂	11月5日 ～ 12月22日	10日	(株)セブンスエンターテイメント	ライブの運営等
鈴木 智仁	8月15日 ～ 9月28日	9日	(公財)千葉県文化振興財団	公演制作、運営業務
中村 よしの	8月24日 ～ 12月8日	9日	(株)キョードーファクトリー	演劇制作業務
松谷 友里菜	8月26日 ～ 9月9日	10日	京都市交響楽団	オーケストラの公演運営業務
佐野 心咲	8月1日 ～ 8月27日	10日	(一社)全日本ピアノ指導者協会	公演制作、運営業務
中村 萌彩	11月6日 ～ 11月26日	10日	新国立劇場	舞台音響
松浦 愛里	11月18日 ～ 12月22日	9日	練馬文化センター	公演運営業務

3) 芸術文化施設見学実習

○芸術文化施設見学実習の目的

2024 年度より芸術文化施設見学実習を再開し、今年度は新潟・群馬の文化施設を訪問した。芸術文化施設見学実習は、各学年の「アートマネジメント研究」の授業内容の中でも重要な活動である。劇場・音楽ホール・美術館・博物館等を訪問し、バックステージなどを見学させていただき、スタッフの方々のお話を聴かせていただく体験は、アートマネジメントを学ぶ学生たちにとって最良の生きた教材である。

また、事前の調査研究、プレゼンテーションと質疑応答、事後のレポートなども含めて、その教育的効果は極めて大きなものがあり、本学が推進するアクティヴ・ラーニングの好例とも言えるものであるため、「アートマネジメント研究（基礎）」および「アートマネジメント研究（応用）」の授業内容の中にそれぞれ位置づけている。

(赤木)

● スケジュール

- ◇ 日程：2025 年 6 月 21（土）～22（日）
- ◇ 6 月 9 日（月）：第 1 回事前研究発表会（於 武蔵野音楽大学）
- ◇ 6 月 16 日（月）：第 2 回事前研究発表会（於 武蔵野音楽大学）
- ◇ 6 月 21 日（土）
 - ・ 新潟市民芸術文化会館 リューとびあ
- ◇ 6 月 22 日（日）
 - ・ 草津音楽の森国際コンサートホール
 - ・ 原美術館 ARC



6月21日（土）		6月22日（日）	
7:45	江古田キャンパス集合		〈朝食（バイキング）〉館内 7:00～
8:00	江古田 出発	8:00	ニュー・グリーンピア津南 出発
	上里 SA (9:15～9:30) トイレ休憩		谷川岳 PA (9:15～9:30) トイレ休憩
	〈昼食〉越後川口 SA (11:30～12:00)	11:45	草津音楽の森国際コンサートホール 到着
13:30	新潟市民芸術文化会館（リ्यूとびあ）到着	12:20	草津音楽の森国際コンサートホール 出発
14:00	コンサート鑑賞		〈昼食〉道の駅あがつま峡 (13:10～13:40)
16:00	施設見学、講義	14:50	原美術館 到着
17:30	新潟市民芸術文化会館（リ्यूとびあ）出発	16:30	原美術館 出発
	〈夕食〉越後川口 SA (18:45～19:30)		高坂 SA (17:50～18:00) トイレ休憩
21:00	ニュー・グリーンピア津南 到着／泊	19:30	江古田 到着

見学実習のしおり

(1) 施設概要と見学者の感想

1 日目 6 月 21 日 (土)

新潟市民芸術文化会館 りゅーとぴあ

基本情報

所在：新潟県新潟市中央区一番堀通町 3-2

愛称：りゅーとぴあ

所有者・設置者：新潟市

指定管理者：新潟市芸術文化振興財団

りゅーとぴあは、音楽・舞台芸術の拠点として、コンサートホール・劇場・能楽堂の 3 つの専門ホールに加え、スタジオや練習室、ギャラリーなど多彩な施設を備えた文化の発信拠点である。日本の伝統芸能からクラシック、ダンスまで幅広い演目に対応し、共通ロビーを介して各ホール、人々がクロスオーバーし、新たな創作が生まれる場となっている。現在は、(公財)新潟市芸術文化振興財団が新潟市からりゅーとぴあの指定管理者として指定を受け、主催事業、貸館事業、日本初の公共劇場専属舞踊団の運営等を通じ、新潟市の文化振興の一翼を担っている。



りゅーとぴあ外観

コンサートホール(約 1900 席)

舞台を客席が取り込み、側面や後方からも舞台を望むことのできるアリーナ形式。波紋が増幅して重なり合うような客席と天井は、音を包み込みながら豊かに広げる効果を持つと同時に、

客席間の親密で祝祭的なイメージの演出となっており、音響的にも、視覚的にもステージとの一体感・臨場感を楽しめます。音量感・残響感・広がり感の 3 つの要素をすべて満たし、交響楽に最も適したホールである。正面には国内最大級のパイプオルガンを設置している。

劇場(固定席 868 席・車椅子席 5 席)

演劇をはじめ、オペラ・ミュージカル・歌舞伎・舞踊などのさまざまな用途に適合する広い舞台と舞台設備を装備。可動のプロセニウムアーチ(舞台と客席を区切っているアーチ)、大小の迫り、すっぽん付きの本花道などが多彩な舞台空間を演出している。

客席は大きな勾配により良好な視野を確保し、3 層になっているバルコニーデザインが活気ある劇場の雰囲気を持つ。そして、舞台からは観客ひとりひとりの顔が見えるような緊張感のある空間となっている。

能楽堂(固定席 382 席・車椅子席 5 席)

桧床の舞台、桧皮葺(ひわだぶ)きの屋根、能楽の上演にふさわしい伝統的な形式を持ちながら、幽玄の闇に能舞台の屋根が消えていくようなシンプルなデザインとなっている。

舞台正面の鏡板を外すことによって中庭が見え、野外の雰囲気も味わうことができる。楽屋は水屋を備えた正式な茶室として「茶会」に利用することができる。

○見学者の感想

コンサートホール、劇場、能楽堂という性格の異なる三つの専門ホールが集まっているのは実際に見てみると不思議な雰囲気を感じた。施設全体の外観やロビーは美しいデザインながらもコンサートホールらしさがあったが、扉を抜けた瞬間に別の世界観が広がるのはりゅーとぴあならではの感想。榎本さんの話では運営において深いところまで伺うことができ、これからアートマネジメントをする上でとても大きな収穫となった。

特に印象に残っているのは、「良い公演を作る」だけの時代は終わった、というところ。ホールが現在抱えている課題を解決していかなければ、ホール自体の存在が認められなくなるというのは、これからの時代を担う者としてしっかりと胸に刻んでおかなければと感じた。それとりゅーとびあを設置者にビジョンがなかったということを聞いたときはとても驚いた。ここまで大きいりゅーとびあでさえ将来の展望がはっきりしてないのかとなったが、だからこそいろいろなことをやるチャンスだと仰っていて、その熱意は手本としていいと思う。

(2327-004 鈴木智仁)

演劇公演が多い約 900 席の劇場は、何公演行うべきなのかの判断が難しいとの話を聞いて、多くの人が鑑賞できることにプラスして主催側の赤字にならないよう企画をたて進めていくことの大変さを感じた。新潟市市民芸術文化会館のみが一つ屋根の下に 3 つの専門ホールが集まっており、アウトリーチやワークショップなどの事業を通して劇場が持っている魅力を高める、使用法の可能性をあげることに挑戦し続けているところにとっても興味を持った。特にアウトリーチの事業は良い公演をすることだけでは増えない観客数を、招待した子供と付き添いとしてきた両親にチケットを買ってもらうことを狙いとする中でチケット販売に繋げているなど、企画を進めていく中で生まれる難しい課題をさまざまな方向から解決していたことが印象的だった。

(2227-004 吉田百花)

施設紹介や現場のスタッフの方の話を聞き、りゅーとびあは挑戦と普及に特に重きを置いている施設であるという印象を抱いた。理由として、公演だけでなくアウトリーチやワークショップ、ジュニア音楽教室などさまざまな層に向けた施策を行っていたり、日本唯一の劇場専属舞踏団である Noism の存在であったりなどが挙げられる。特に、Noism の挑戦を重ねながら限界を定めず、団体や劇場の可能性を広げていく

姿勢には深く感心した。また、中でも視覚障がい者向けに行われるワークショップが印象に残った。目ではなく指先や手のひらでダンスを感じ取ってもらうと共に、視覚障害者の感じ取る力を演者が体感するという参加者だけでなく双方にとってとても貴重な体験になる場であると考えた。さまざまな挑戦を続ける反面、行政との関係や施設運営などに関する課題があると感じたので、今後の事業についても追っていきたい。

(2527-005 渡邊明日香)



ホール職員によるレクチャーを受講する様子

新潟市市民芸術文化会館 りゅーとびあでは、能楽堂、劇場、コンサートホールの 3 つのタイプの異なる劇場を見学しました。この中で印象に残ったのは能楽堂で、舞台には橋掛かりや天井、松の絵が描かれた鏡板など、伝統的な舞台の特徴がしっかりと備えられていました。普段あまり入ることのない空間で、日本の伝統芸能のための特別な舞台装置を見ることができ、印象的な体験となりました。また、コンサートホールでは実際にピアノの演奏を聴くことができ、ホールの音響の良さを実感しました。柔らかい響きで、細かな音までしっかりと聞こえ、演奏に集中することができました。

りゅーとびあは、国と新潟市の支援を受けて運営されており、地域の人々に開放された文化施設として、とても重要な役割を果たしていると感じました。

(2527-007 張 藝馨)

普段は観客としてしか関わることのできない芸術文化施設について、舞台裏や施設の運営について学ぶことができ、非常に貴重な経験となった。見学に先立って行った事前学習では、施設の成り立ちや事業内容について学んでいた。しかし、実際に現地を訪れて、スタッフの方から直接説明を受けたり、講義で現場の具体的な課題や工夫について聞いたりする中で、事前の知識だけでは見えてこなかった多くの実情を知ることができた。

また、講義を通しては、施設の運営に関する話を直接聞くことができた。中でも印象に残ったのは、りゅーとぴあにはコンサートホールのほかに、演劇の公演に使われる「劇場」と、伝統芸能のための「能楽堂」という、専門性の異なるホールが計3つ存在するという点である。それぞれのホールが持つ役割や特徴の違いについて、詳しく説明を受け、芸術文化を多角的に支える施設であることを実感した。コンサートホールは、先述の通り交響楽に適したホールで、大規模なパイプオルガンも備えている。一方、劇場は演劇やバレエ、ダンス、歌舞伎などさまざまな舞台芸術に対応できる構造をもつ。劇場の客席数は約900席で、舞台と客席との距離が近いことが特徴だが、その席数ゆえに1回の公演では利益を上げるのが難しく、2～3公演しないと採算が取れないという話が印象に残っている。これは、舞台芸術における大きな課題の一つであると感じた。

また、能楽堂は、伝統的な能の上演にふさわしい屋内施設であり、桧の床や檜皮の屋根など、本格的な構造が再現されていた。客席数は382席と限られており、より少人数での鑑賞に特化しているように思われた。こうした日本の伝統芸能のための空間が、同じ文化施設の中に用意されていることにも大きな価値を感じた。

(2527-003 高岡のぞみ)

りゅーとぴあは、予想以上に天井が高く、開放感があり、とてもきれいな施設で、近代的な造りに驚いた。新国立美術館を思わせるようなデザインで、開館から30年経っているとは思えないほど、清潔感があり、まるで10年ほど前に

建てられたばかりのような印象を受けた。コンサートホールは天井が高く広々としていたが、舞台との距離感は意外と近く、2階席からでも演奏者の姿や表情がよく見えた。

今回はピアノソロの公演を鑑賞したが、今度はオーケストラの演奏を聴いて、音の広がり方や響きの違いを感じてみたい。また、ワンコインコンサートなど、ピアノ以外の楽器の音色やアンサンブルの響きもぜひ体験してみたいと思った。内装は全体的にシンプルで淡白な印象だが、その中でパイプオルガンがひととき存在感を放っており、全体の雰囲気を引き締めていた。個人的にもとても好みのホールだった。

(2327-006 松谷友里菜)



ホール職員による施設の説明

新潟市民芸術文化会館りゅーとぴあのコンサートホールの内部空間には木材をふんだんに使用され、温かみがありながらも豊かな音響効果が得られる設計となっており、特にクラシック音楽の演奏に最適でした。舞台の幅と客席の配置は精密に計算されており、すべての座席で最良の聴覚体験が保証されています。さらに、練習室や展示スペースが完備されている点も、地元アーティストにとって理想的な創作環境を提供しており、大きな驚きでした。

コンサート鑑賞では特に印象的な体験をしました。ピアノの音色が客席の隅々まで明瞭に響き渡り、テンポが速く音の明瞭性が求められるパッセージでも、遠方の席までクリアに聴こえました。このホールは建築家の精密な計算と職人の技術が見事に融合し、単なる「音楽鑑賞」を

「音響空間体験」という高次元の芸術へと昇華させています。

建物外観も特徴的で、ガラスと金属で構成されたファサードは現代的でありながら重厚感があり、周囲の緑と水辺の景観と調和することで、芸術と自然が融合した快適な芸術環境を創出していました

新潟市市民芸術文化会館での体験は、一時的な感動だけでなく、音楽と建築の調和の可能性を深く実感させるものでした。

(2527-009 李 嘉真)



見学当日に鑑賞した公演のチラシ

芸術文化政策論の授業の際にりゅーとぴあを知り、全面ガラス張りの綺麗な施設という印象を持っていたのだが、実際に行ってみることで、新潟の自然を存分に感じることができ、より魅力を感じた。天候によって見え方が大きく変わる施設であるため、季節に合わせて雨や雪を題材にしたコンサートを開催し、適切な天候となれば、観客の没入感も高まるのではないかと考えた。

また、世界でも稀な、コンサートホール、劇場、能楽堂の3つを所有している施設ということで、それだけでも様々な事業展開をすることができると感じたが、世界で唯一の公共劇場専

属舞踊団「Noism Company Niigata」を活かすことで、劇場の持つ可能性をさらに拡大したいというお話を聞いた時は、今後注目すべき施設であると強く感じた。良い公演を作るだけではなく、アウトリーチや地域経済への貢献を見据えていることが、芸術祭や音楽祭の開催につながり、地域住民から愛される施設作りに繋がっているのではないかと考えた。

(2227-005 生越一希)

能楽堂・コンサートホール・劇場というジャンルの異なる3つの芸術を同じ場所で体験できるという、非常に充実した施設だった。能楽堂では鏡板を外すことで、本物の竹林を背景にした公演が可能で、自然を芸術に取り入れられる仕組みに感心した。「雪見能」も可能ということで、美しさを想像したらぜひ一度は鑑賞してみたいと感じた。コンサートホールは想像以上にコンパクトで、どの席からも舞台が見やすく、演奏者との距離が近く感じられたが、音響に関しては個人的にはやや物足りなさを感じた。ただ、普段自分からピアノのコンサートに行くという機会はほとんどないため、そのような機会を得られたのは貴重な経験であった。劇場では演劇公演が多く、有名な俳優が訪れるらしいが、900席というキャパシティでのチケット運用には難しさもあると知り、大変だなと感じた。「地方にいても誰でもクラシック好きになれる」というレクチャーをしてくださった榎本さんの言葉が、特に印象に残っている。

(2327-009 中村萌彩)

2日目 6月22日(日)

草津音楽の森国際コンサートホール

基本情報

所在：群馬県吾妻郡草津町大字草津字白根国有林 154 林班

運営団体：群馬県草津町

用途：クラシック音楽のコンサート

座席数：608 席

設計：吉村順三（建築家）

ホールには 608 の固定席とステージ後方に大編成コーラス用のベンチがある。その他、楽屋が 3 室、個室が 2 室、ラウンジ、バーカウンターなど本格的な機能を備えている。客室やベンチ、ロビーの椅子も特別にデザインされたものである。

もともと温泉地として有名であった草津町は、温泉地から観光地への発展・さらなる地域活性化を推進する取り組みに力を入れており、2001 年には温泉・自然・文化（音楽ホールなど）・スポーツ（スキー場など）を融合させた、国際温泉リゾートづくりを目指す計画を制定。

そのような取り組みの中で、草津の雄大な自然の中で音楽を楽しむことのできるホールの設計を建築家吉村順三氏に依頼した。吉村氏は当時多くのモダン建築を設計しており、このホールもまた近代的なつくりで周辺の自然と見事に融合したデザインとなった。



ホール外観

1991 年の完成以来、草津夏期国際音楽アカデミー&フェスティバルをはじめとする音楽イベントの会場として、毎年多くの人が訪れている。

○見学者の感想

コンサートホール内装が綺麗で、このホールにも借景が使われているところが印象的だった。昼には自然光が差し込み、夜は星空が見える構造になっており、草津の最高のロケーションで聴く演奏はとても貴重で、魅力的だと感じた。バルコニー席もあり、合唱なども楽しめる素敵なホールだなと感じた。奥の壁の形が武蔵野音大のブラームスホールの様な、違う凸凹の形になっていた。

木造風の外観や、ホール内部のガラス窓などから、自然を感じることができて居心地の良かったと感じた。この自然を生かした作りであることを、さらに生かした公演が多く、実際に、利用者の体験談として、「夏の高原音楽祭にぴったりの雰囲気」「演奏者が近くに感じられるアットホームなコンサート」などと評価があり、利用者にも、工夫や良さが伝わる運営をしているのだと感じた。

一流の音楽家が来てレッスンなどのアカデミーを実施しているだけあり、メインホールはかなり声が響き、音響的にも優れたホールだった。

(2327-010 松浦 愛里)

この施設は草津町の観光課で管理していることから、観光資源として活用していることを感じました。平成 3 年頃から使用されているホールですが、外見や天井、客席、浮雲兼照明器具がとても現代的な造りをしていると感じました。上品な響き方をしそうだと感じ、こちらで演奏会を聴いてみたいと思いました。音楽祭のメインの拠点となるホールが作られることで、外部から人が来やすくなったのではないかと感じました（メインの演目がわかりやすい点、普段聴くことのできない会場で音楽体験ができる点）。

舞台裏の通路がやや狭いと感じ、コントラバスなどの大型楽器の移動が大変そうだと思います。舞台裏には楽屋や練習室があり、出番直前まで調整ができるため、演奏者への配慮ができていたと感じました。ホール後方の斜面になるところは、下にお手洗いがある構造になっており、空間に無駄がない設計だと感じました。ロビーには大きな窓、バーカウンターや椅子が多くあり、休憩時間も飲み物を楽しみながら自然を眺めリラックスできると感じました。ロビーでパーティーをすることもあるとお聞きし、広い空間で自然も眺めることができるため、向いている空間だと感じました。

(2227-007 加藤 花)



ホール見学の様子

ホール内は想像以上に響きがよくクラシック音楽の演奏会に特化しているように感じられた。周囲の自然豊かな風景を借景しているところが面白いと思う。都内の有名なホールとはまた違った特徴があり高原に囲まれたロケーションと音楽が融合していて素晴らしいホールだった。コンサートの企画を見ても、海外の演奏者を招いたり、地域に根差した演奏会をしたりとバランスが取れているように感じた。

ホールの規模からして大編成のオーケストラというよりも演奏者と観客が身近に感じられるように思う。見学したときは演奏会がない時だったが、普段の演奏会は何のくらいの活気があるのか気になり行ってみたいと思った。音楽フェスティバルは2週間で6000人が来場することだが、来られる客層として周辺に住む人

が多いのか、遠方から来られる人が多いのかについても気になった。

(2427-002 菊池結衣)

音楽と自然が見事に調和した空間に心を奪われた。ホールの雰囲気は温もりが感じられる落ち着いた雰囲気、視覚的にも聴覚的にも優しい空間だった。また、照明のデザインがお洒落で素敵だなと感じた。このような素晴らしい空間は、かつて天皇皇后両陛下（現・上皇上皇后両陛下）もこのホールを訪れ、演奏をご鑑賞されたことがあると知り、非常に感動した。日本の象徴である陛下が足を運ばれるほど格式と価値のあるホールであることは、この場所の文化的・芸術的意義の大きさを示している。その事実を知ったことで、このホールがいかに日本の音楽文化の中でも特別な位置にあるのかを、改めて強く実感した。見学を通じて環境と音楽について学ぶことができた。いつかこの空間で演奏をしてみたいと思うほど、素晴らしく忘れがたい音楽空間だった。

(2327-005 中村よしの)

私がまず一番驚いたことは、他のコンサートホールとは異なり、施設の管理は全て観光課の方々が行っているということだ。

主催イベントの一つである、『草津夏期国際音楽アカデミー&フェスティバル』など、メインで何か出来るようなものを創りたいという思いから創立されたという話から、地域を盛り上げたいという当時の人々の思いが伝わった。

ホールは比較的にコンパクトではあるが、小さなホールだからこそ音をより身近に感じる事が出来る良さがあるのではないだろうか。また、楽屋はとてもこじんまりしていたが、綺麗な部屋が5つも設備されている。そして、メインロビーや楽屋は木を貴重としており、自然を大切にしたいデザインから、温かみがあって素敵だと感じた。

(2427-006 柏倉真歩)

ホールの周りは自然で溢れていて、東京では味わうことのできない音楽と自然が共生している空間でした。ホールは思っていたよりもコンパクトな構造をしていて、声がとても響きました。舞台の後ろには借景があり、ホールの中でも自然を感じられるようになっていました。舞台の左側には 2002 年に設置されたイタリア製のパイプオルガンがあり、見た目はすごく可愛らしかったです。舞台の上には合唱用のバルコニー席があり、自然を背景にして歌えることはとても贅沢であると感じました。

舞台裏も見させていただき、いろんな種類の楽屋がありました。なかには大きな窓があり、自然を眺めながら練習できる場所もありました。上皇ご夫妻が来られてコンサートを鑑賞し、実際に演奏もされるという話を聞いてとても驚きました。上皇ご夫妻に愛されるように、このコンサートホールは非日常の空間を味わうことができ、心も癒される素晴らしい環境であると思いました。

(2527-004 三ツ野 綾優)



パイプオルガンを見学する様子

草津音楽の森国際コンサートホールは、豊かな自然に囲まれた場所にあり、「草津国際夏期音楽アカデミー&フェスティバル」のメイン会場としても知られています。建築美、音楽芸術、自然の風景が一体となった文化施設で、その魅力を実際に肌で感じる事ができました。

館内では、スタッフの方にご案内いただきながら、演奏ホール、客席、舞台裏などを見学しま

した。シンプルで現代的な外観でありながら、「人と自然の共生」というコンセプトが随所に感じられました。内装には多くの木材が使われており、温もりのある雰囲気と優れた音響効果を生み出しています。特に印象に残ったのは、舞台の背面にある大きなガラス窓で、開けると森の景色が目の前に広がり、まるで自然の中で音楽を聴いているような感覚を味わえます。

私は見学中に、観客層や施設の運営について質問してみました。担当の方によると、平日は都市部から訪れる中高年の音楽ファンが多く、観光目的の来館者も多いとのことでした。地図で調べてみると、ホールの周辺には草津温泉やゴルフ場などのリゾート施設もあり、観光と文化が自然に結びついている地域だと感じました。

この研修を通して、草津音楽の森国際コンサートホールが単なる演奏の場にとどまらず、「文化×観光×癒し」が融合した体験型空間としての役割を果たしていることを学びました。幅広い観客層を受け入れ、地域資源との連携を図ることで、文化発信と地域振興の両立を実現している点は、今後の学びや将来のキャリアにも大いに参考になると思いました。

(2527-008 姚 祥)

このホールは、前日に見学にしたりゅーとぴあとは異なり、草津夏期国際音楽アカデミー&フェスティバルをメインとしたホールとして運営しており、今年 45 回目という歴史のあるイベントを維持し続けている。私が気になったのはこのホールの照明は三角錐になっていることだ。天井から下がっている照明は三角錐を組み合わせたようになっていてステージのサイドにある小さい照明も三角錐の形になっていた。照明は埋め込められていたり、シャンデリアのようになっているものしか知らなかったが、このほうが光を広い範囲まで届けることができると考える。収納も興味深く、ステージの後ろにひな壇などが収納されているらしい。客席とステージが割と近く、より迫力も感じる事ができると考える。地方のコンサートホールの運営について知ることができ、他にもどんなコンサートホールがあるのかを知りたいというきっかけになった。

(2527-001 赤見佳奈)

原美術館 ARC

基本情報

所在地：群馬県渋川市金井 2855-1

博物館法による分類：登録博物館

設置者：(公財)アルカンシエール美術財団

開館年月日：2021 年 4 月

設計：磯崎新



美術館外観

公益財団法人アルカンシエール美術財団（理事長：原俊夫）は、1979 年に当時の日本では希少な現代美術専門館として、東京都品川区に「原美術館」を、1988 年には群馬県渋川市に別館「ハラ ミュージアム アーク」を開館、この 2 館において、現代美術を通じた国際交流の推進と現代美術の活性化を軸に、アーティストとともに多彩な活動を展開してきた。

品川区に所在した原美術館は、2021 年 1 月に閉館し、原美術館とハラミュージアム アークを統合した。2021 年 4 月「ハラ ミュージアム アーク」を改称して、群馬県渋川市にて「原美術館 ARC」としてリニューアルオープンした。

運営母体の財団名である「アルカンシエール／Arc-en Ciel（虹）」を象徴する「ARC」には、「アートセンター」の意味も含まれている。

建築について

磯崎新による原美術館 ARC は、伊香保グリーン牧場に隣接する緑豊かな広い敷地に作られている。ピラミッド型の屋根を持つ正方形のギャラリーA と、両翼に細長く伸びるギャラリーB・C というシンメトリーを意識して配置された 3 つの展示室は、やわらかい自然光がトップライトから降り注ぐシンプルな空間の中、現代美術の展示を行っている。

一方、特別展示室「観海庵」は、書院造をモチーフにした静謐な和風の空間で、木、石、和紙、漆喰で仕上げた内部のいたるところに名工の技が見られる。また、屋外にはアンディ ウォーホルやジャン＝ミシェル オトニエルをはじめ、内外の現代アーティストによる常設作品が点在している。



美術館全景

○見学者の感想

この施設では何よりも開架式収蔵庫を見学できたことが印象に残っている。作品の保護のための環境維持や絵画ラックなどについては、学芸員課程の授業でも学んだことがあったが、絵画ラックにかけることで絵画の裏側を見ることができるという着眼点を初めて知ることができた。絵画の後ろにはサインや来歴が書いてあったり、証明書が添付されていたりするなど、その作品のバックグラウンドの情報が詰まっているととても重要なポジションであることが勉強できた。また、収蔵庫といえど、むき出しで保存し

ていることに少し不安を覚えたのだが、額縁に入れないことでキャンバスの側面を見ることができ、絵の具のたれ具合などから、絵画がどのような環境で描かれたのか想像ができることを説明いただき、改めて作品の情報というものは作品全体、些細なところから重要なことを拾えるものであることを実感した。

また、個人的に私は東洋古美術を鑑賞するのが大好きなので観海庵は大変すばらしく、ポストカードも手に入れ、コレクションが増えたのでとても嬉しいばかりである。

(2227-001 今川知彩)

「この、原美術館 ARC という時間芸術」という展覧会を鑑賞しました。タイトルを聞いた時点でその由来について説明を受け、作品が天気や季節、時間によって見え方を変えるということに納得しました。

実際に訪れた当日は晴天で、展示室に差し込む自然光や、芝生や植物を通して感じる風の動きが、その日ならではの体験として印象に残りました。特に印象的だったのは、オラファー・エリアソンの《Sunspace for Shibukawa》です。この作品は、晴れている日にのみプリズムレンズを通過した太陽光が虹となって現れる仕組みになっており、晴天の日に鑑賞できたことに歓迎されているような感覚を覚えました。長時間滞在したわけではありませんが、天気や時間帯によって印象が大きく変わることが想像できました。作品だけでなく鑑賞者の感じ方や周囲の環境も含めて成立する展示であり、「時間芸術」という言葉の意味を体験としても再確認できました。

(2327-001 上田連也)

原美術館で印象に残っているのは、ソフィ・カルの「限局性激痛」だ。第一部は終わりまでのカウントダウン、第二部は立ち直るまでのカウントアップ。第一部は写真でメッセージを伝えており、その人の思い出の場所だったり人だった。面白いのが第二部で、布に文字が縫われていた。白布が男性側で、黒布がソフィ・カル本人だと感じた。

また、特別に見学させていただいた収蔵庫にはギャラリーの作品の入れ替えや展示をしていない作品が収納されていた。ラックに取り付ける専門の器具にヒートンをかけて保存をしている。作品の裏には展覧会の出品した作品の記録や名前などがあり、出来るだけ分類して保存しているということが分かった。収蔵庫地下にある作品は、草間彌生の「自然消滅」や、「0の空間」というタイトルの部屋がある。「0の空間」は、品川にあった原美術館から運ばれてきたらしい。また、収蔵庫地下にある大きい作品はどのようにして地上に持ってくるのかを聞いたところ、作品を分解して展示するというを知ることが出来た。

(2327-003 酒井千妃呂)

私はグリーン牧場には行ったことがあったのですが、腹美術館 ARC に行ったことがなかったため、すごくいい経験になりました。館内には現代美術ギャラリー3室と和風の特別展示室、屋外に彫刻作品もありました。原美術館 ARC の特徴として、作家との関わりを大切にして展示されていることを伺いました。

保管庫では展示室より近くで作品を見ることが出来、何より作品を後ろから見ることができました。作品の後ろにはたくさんの情報が書かれており、その作品の時代を想像することもできました。

今回は、ソフィカルによる「限局性激痛」を見ました。何度も見返して少しだけ理解することが出来ました。カルの人生最悪の日までのカウントダウンと、自身の心の痛みをほかの人の苦痛と交換することで徐々に痛みが和らいでいく過程を見るというところから自分自身の心情にもおおきな変化を与えるような作品でした。できればもっとゆっくり見たいと思いました。

(2427-001 雨貝柚那)



りゅーとぴあのロビーにて

(2)芸術文化施設見学実習における事前研究・プレゼンテーション

芸術文化施設見学実習を実施する場合、訪問施設に対する事前調査・研究が不可欠である。

平成 25 年度より、全学年の学生を対象として、見学実習のための事前研究・プレゼンテーションも実施している。訪問施設の基本情報のほか、各々の施設に関連する様々な事項を学生が調査し、施設見学前後にパワーポイントを用いてプレゼンテーションを行うというものだ。学生は、基本的には 2～3 人 1 組でプレゼンテーションを割り当てられ、指定された担当施設に関する調査内容を発表することが求められている。

調査結果の発表を行ったうえで、施設に実際に見学することにより、個々の事例に対する理解度が深められるとともに、その内容をプレゼンテーションすることで、学生同士が批判的に意見交換を行うことが求められている。



6 月 9 日 事前勉強会（於：武蔵野音楽大学）

5.各科目からの報告

「企画制作演習 I・II」

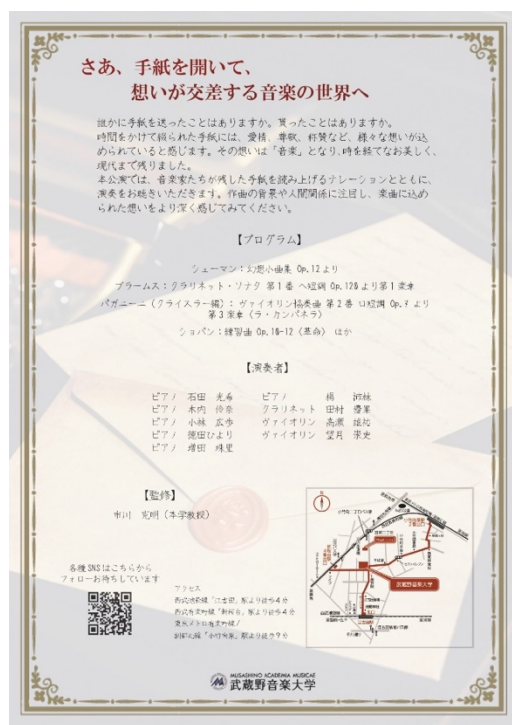
アートマネジメントコース 4 年生の必修科目である。卒業論文が理論的な学修の集大成であるのに対する、実践的な学修の集大成であり、4 年間の学びの成果が発揮される科目である。

I および II を通して、学生たちが力を合わせて演奏会を企画制作し、学内のホールにおいて実際に演奏会を開催する。「アートマネジメント研究（応用）I・II」において学んだ企画制作の知識をもとに、「アートマネジメント実習 I～III」における現場体験を生かし、1 つの演奏会を創り上げることによって、音楽公演制作者として必要とされる実務的な技能を修得することを目標としている。

I（前期）では、演奏会企画の立案と、実現に向けての準備作業を進めた。企画性の高い公演を目指し、履修学生全員から提案されたアイデアをもとに検討を進め、相互の意見交換によって企画案を絞り込み、練り上げて最終的に 1 つの企画にまとめた。さらに具体的に公演のプランを作成し、出演者、編曲者等に協力を依頼し、宣伝材料の準備までを行った。なお、今年度は初めての試みとして、学生が 4 年に進級する以前に、企画についての相談を進める時間を設け、春休み中に基本的な方向性をまとめることができた。それによって例年よりも早くスタートを切ることができ、多少余裕をもって公演に向けた諸々の準備に取り掛かることが可能となった。

また II（後期）では、I において立案した公演計画に沿って、学内ホールにおける演奏会実現に向けて、リハーサル等の諸々の制作業務を進める一方、照明プランの作成、チラシや公演プログラムの編集、宣伝活動などを並行して行い、公演当日を迎えた。また公演終了後には、アンケートを集計するとともに、出演契約書や収支計算書などを模擬的に作成し、一連の企画制作業務について自己点検を行った。

前期 15 回、後期 15 回の授業時間に、教室において講義や打合せ等を行ったが、授業時間外にも多くの時間をかけて、各担当学生が、アートマネジメント研究室やブラームスホールなどにおいて必要な作業を進め、12 月 5 日（金）つつがなく演奏会を開催した。



公演チラシ（表・裏）

授業内容の詳細は、学生が作成した「令和7年度『企画制作演習Ⅰ・Ⅱ』報告書」に記録を残しているが、本科目の授業成果発表として実施した演奏会の概略は以下のとおりである。

【公演名】手紙 ～音楽に想いを込めて～

【日時】2025年12月5日（金）18:30～20:30（18:00開場）

【会場】武蔵野音楽大学 ブラームスホール（423席）

【入場料】無料（全席指定）＊チケットはteketのシステムを活用した事前予約制

【企画趣旨】

手紙は、相手のことを想う様々な気持ちが表れるものである。そのため、大切な人や尊敬する人、愛する人などに向けて送った手紙、もらった手紙を読むことで、当時の背景、関係性、ひいては曲に込められた想いが浮かび上がってくると考える。ナレーションと手紙の読み上げを交えながら、曲に込められた音楽家たちの想いを読みとき、楽曲への理解と没入感を深められる演奏会を行う。

【プログラム】

第1部

ロベルト・シューマン&クララ・ヴィーク

シューマン 幻想小曲集 Op. 12 より 第1曲〈夕べに〉

第2曲〈飛翔〉

ヨハネス・ブラームス&リヒャルト・ミュールフェルト

ブラームス クラリネット・ソナタ第1番 へ短調 Op. 120 より 第1楽章

フランツ・リスト&ニコロ・パガニーニ

パガニーニ 24の奇想曲より 第9番

リスト パガニーニによる大練習曲集より 第5曲〈狩り〉

パガニーニ ヴァイオリン協奏曲第2番 ロ短調 Op. 7 より 第3楽章〈ラ・カンパネラ〉

リスト パガニーニによる大練習曲集より 第3曲〈ラ・カンパネラ〉

第2部

フレデリック・ショパン&フランツ・リスト

ショパン 練習曲 Op. 10-12 〈革命〉

ショパン ポロネーズ第5番 嬰へ短調 Op. 44

フレデリック・ショパン&コンスタンチア・グワトコフスカ

ショパン ワルツ第13番 変ニ長調 Op. 70-3

フレデリック・ショパン&マリア・ヴォジンスカ

ショパン ワルツ第9番 変イ長調 Op. 69-1 〈告別〉

フレデリック・ショパン&ジョルジュ・サンド

ショパン 24の前奏曲 Op. 28 より 第15曲 変ニ長調〈雨だれ〉

第17曲 変イ長調

第23曲 へ長調

第24曲 ニ短調

【演奏】

Pf. 石田光希／木内伶奈／小林広歩／徳田ひより／増田珠里／楊沛林

Vn. 高瀬雄祐／望月崇史 Cl. 田村優果 （本学学生）

【朗読】

大竹豊 岡庭央昂 長橋亜音（本学学生）

【司会】

生越一希（本学アートマネジメントコース4年）

【影アナウンス】

川村桃加（本学アートマネジメントコース4年）

【照明技術協力】

西田俊郎（本学講師）

【音響技術協力】

渡邊邦男（元本学講師）／松宮辰太郎／百合山真人（本学講師）

【楽曲解説原稿執筆】

須藤美咲／石塚紀子／椎名明日香（本学音楽学コース学生）

【制作スタッフ】

リーダー：生越一希

サブリーダー：川村桃加／坂井りずむ

制作：吉田百花／生越一希／坂井りずむ

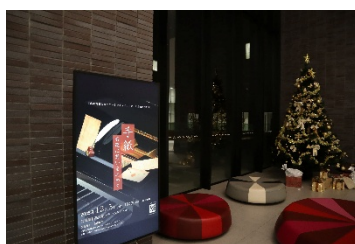
営業：大塚音和／今川知彩

広報：加藤花／川村桃加

演出：今川知彩／加藤花（アートマネジメントコース4年）

【監修】

市川克明（本学教授）



「舞台技術概論Ⅰ・Ⅱ」

担当教員：西田 俊郎

前期

令和7年度 前期授業は2年生8名で、その内の2名は、外国籍の学生で、武蔵野音楽大学では、初めての経験となった。コミュニケーションが上手く取れるか心配ではあったが、1名が、幼少期の頃から日本に住んでいたため、日本語には全く問題なく、伝えたい大事なところは、通訳してもらった。

これまで毎年、課外授業として、大劇場でオペラを鑑賞していたが、上手く都合が合わず、課外授業が出来なかったのが、残念ではあった。学生の授業参加態度については、真面目な生徒が多く、積極的に授業に取り組んでいたと感じた。中でも、外国籍の学生は、真面目でとても優秀であった。

後期授業は、上記の8名に3年生1名、留年している2年生1名が加わった。2人とも前期授業の単位は、取れていたため、後期授業の単位を取るための再履修であった。前年度と同じように後期は、ブラームスホールで、授業を行った。

11月8日	照明バトンの操作
15日	照明器具の使用
22日	照明卓の説明
12月6日	照明卓の使用法
13日	明かり作り
1月7日	ゲネプロ
17日	本番

学生5人1組をAとBグループに分け それぞれが演奏する曲の明かりをデザインする。

Aのグループはピアノと歌 ディズニー曲

Bグループは楽器演奏 ジブリ 曲

Aグループは明かり作りのデザインは良かったのだが、演奏が5人で合わせての練習不足で少々残念であった。Bグループは、当日にメロディラインを吹く生徒が、休んだ為、急遽、他の生徒がメロディラインを演奏した。トラブルがあっても、本番をやるために、ちゃんと対処し対応する臨機応変さが出来た事が素晴らしかった。演奏にばらつきが出てしまったことはしょうがないが、7年度の学生は前期も後期も積極的に取り組んでいたと感じた。

(西田)

「広報宣伝資料製作」

担当教員：松永 路

本年度は 8 名の学生とで授業をすすめた。

「広報宣伝資料製作」で何を学び、何を製作するのかを伝えスタートした。「架空の演奏会」の企画をし、最終的には「公演の宣伝チラシ製作」を課題とし完成させた。

「架空の演奏会」はクラシックの公演を目標とした。授業のおおまかな流れは例年通り下記の通り。

- 1) 「架空の演奏会」の企画
- 2) 企画書の作成と確認
- 3) チラシのデザインのラフを描く
- 4) Adobe を使いデザインし表裏を完成させる

企画内容を進めている途中、知人のコピーライターに「キャッチコピー」の大切さの講義をして頂いた。学生には真面目に『気に入っている（なっている）キャッチコピー』を発表してもらいディスカッションする楽しい授業になった。

企画立案は問題ないが、デザインのラフを紙に書くことは慣れていない学生もいるようで（当たり前だが）他人に伝えるための手段として、そして自分の頭の中の整理をすることとしても紙に書くことの重要性をもっと上手く伝えていきたい。

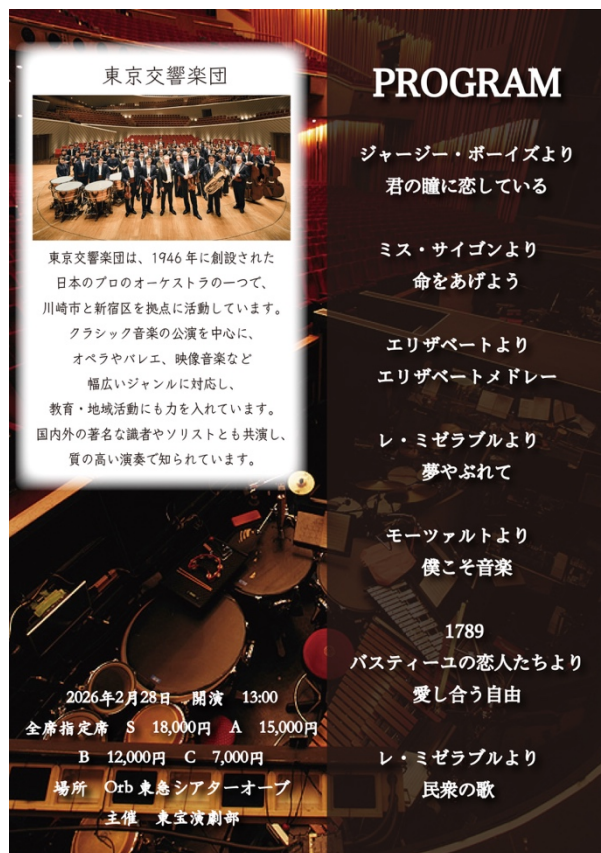
学生と接して現在では情報を取りに行くツールは、ほぼ SNS だと実感している。SNS 情報（Web バナーなど）の内容はチラシとは違うので宣伝するにあたりチラシと SNS 情報での違いも学生と考えていきたいと思っている。

Adobe の操作は皆問題なく、他フリーソフトで絵を描きチラシに落とし込む学生もいた。素材を探すことよりも AI で画像を修正したり作り上げたりする学生もおり驚かされる。

デザインワークのアプリケーションの更新が続く昨今、「Adobe」でないソフトを使用することも視野に入れるべきだと考えている。世の中の動向も見守りたい。

（松永）

「広報宣伝資料製作」の学生作品より（架空公演のチラシ）



「劇場音響概論 I・II」

担当教員：百合山真人・松宮辰太郎

3年次の必修科目である「劇場音響概論 I・II」は、前・後期を通して、劇場における音響の役割を多角的に考察し、舞台音響の基礎を学ぶことを目的としている。

前期は、舞台芸術を創造する様々な領域の劇場スタッフの仕事を理解し、各スタッフとのコミュニケーションの取り方や観客との関わり、舞台芸術者に必要な「音」の知識と音響プランの構成を学ぶ。

後期は、聴覚の演出家とも言われる「舞台音響の仕事」を実践的に学ぶため、録音スタジオでラジオドラマを共同で制作する。履修する学生全員が主体となり、物語の選定と台本作成、演出・配役・音響プランの構成を行う。効果音作りや選曲、録音・編集・ミックスなどの作業を通し、音だけで表現するラジオドラマの世界を体験し、無から有を生む舞台芸術に関わるスタッフに必要な発想力とコミュニケーション能力を磨き、アートマネジメントに携わる人材の育成を目指す。

■前期

授業内で、新国立劇場の見学を本年も行うことが出来た。新国立劇場に来られなかった学生は、新橋演舞場演目「歌舞伎刀剣乱舞」の見学と分かれた。説明を聞いたり資料を見たりするより、実際の劇場、伝統芸能に触れることは、学生にとって有意義な体験となる。例年学生との日程調整に難航し、その上で劇場とのスケジュール調整に難航するため、他にも受け入れ可能な劇場をできるだけ確保しておきたい。有楽町 IMASHOW などは受け入れに対して前向きに検討してくださっているので、来年度以降検討したい。

前期は座学にとどまらず「耳を取り戻す」を目標に掲げ行なった。いつもはイヤフォンをして生活しがちな現代の学生たちにとって、普段の大学の周りの音に耳を傾けながら歩く、という時間を取ることは自分の耳に意識を向けられる良い導入となった。意識しないと聞こえない音、自分だけが聞こえた音、聞こえているのに聞いていない音、など、耳と意識を取り巻く不思議な現象を紹介した。また、百合山氏が昨年に引き続き取り入れておられる「窓から人が飛び降りる」という思考訓練を今年も行なった。これは「自らの職域からひとつの事象を見つめる」というきっかけを意図があり、今年筆者が授業終了後に「窓から人が飛び降りる」音を作り、紹介した。



劇場見学の様子

■後期

「スイミー」(作: Leo Lionni) という絵本を題材にし、ラジオドラマの制作に取り組んだ。全ては学生たち主導で始まり、絵本の中のナレーションをラジオドラマとした時に繋がりが生まれるよう脚色し、声の録音・編集、選曲、効果音作成という流れで取り組んだ。作品の出来は、プロの目線で見ても、皆の想いが伝わり、とてもよく出来ていた。今年は学生が作曲した音楽でストーリーを紡いでいく作品となり、最後の授業まで「この楽器も録りたい」と学生たちが自分の楽器を持ち込み録音するという盛り上がりようだった。毎回授業ではさまざまな意見が活発に飛び交い、自分の意見が通るときばかりではないことも、舞台芸術の片鱗に触れられたのではないかと思う。実際、舞台の稽古はそのぶつかり合いの連続が、クリエイションとして一つの作品を作っていく。



録音と編集の様子



学生が自分の楽器を持ち寄り録音する様子

後期の授業は90分ではとても足りないので、数時間をまとめて確保する必要がある。90分では機材の準備と片付けを除くと正味60分、これではとても自由なクリエイションをしながらアイデアを形にしていくには短すぎる。

完成した作品を、百合山氏がプロの演出家などに聞いてもらい、そのリアクションを学生に公開した。プロの目で評価される(良くも悪くも)という経験は、何にも変え難い心の栄養となる。



完成視聴会の様子

■課題

学生がまとめて 2-3 時限連続の時間割を確保するということがとても難しく、誰かが他の授業を公欠にせざるを得ないといった事態が起きている。授業登録前に、この授業の後期はこのような可能性が濃厚である旨を告知しておく、もしくは、後期は週一ではなく不定期開催、という扱いにしてもらうなど、今後相談が必要と考える。

後期に行うラジオドラマの制作について、録音などが一通り終了して役割を終えてしまった人が、仕事がなく手持ち無沙汰となることがある。このため、来年度以降は例えば 2 チームや 3 チームに分けて暇を与えない策が必要である。また、録音スタジオの他に DTM 室を使用したい。

この授業はあくまで概論であるがゆえに、音響機材の詳しい取扱方などには触れていない。そのため、現に昨年度の学生は、企画制作で初めて音響機材に触ることになり、フォローアップが必要だった。これが毎年起こるなら、前期のどこかの時間で劇場のホールの音響機材の使い方、などは触れておいた方が良いのかもしれない。

成績について学生から問い合わせがあり、後期からレポートを課すことに決めた。

明確な成績つけ方の基準が示されると、それに照らし合わせて成績をつけることが出来るため、公平さは増す。

■まとめ

百合山氏が 5 月より London の Royal National Theatre に留学される。帰国後はさらに氏による世界最先端の音響演出について見聞を広められるし、その背中を見て追いかける機会がある学生たちが羨ましい。この授業から将来の舞台音響家が誕生するとよい。

(文責：松宮)

「芸術文化政策論Ⅰ・Ⅱ」

担当教員：赤木 舞

3年次の必修科目である「芸術文化政策論Ⅰ・Ⅱ」は、文化政策に関する全般的な概要を把握し、国および地方公共団体の文化行政の構造、政策の方向性、およびその基盤を形成している文化関連の法制度等を幅広く学び、わが国の芸術文化政策に関する理解を深めることを目標としている。

前期の「芸術文化政策論Ⅰ」は、わが国の文化政策の意義、歴史、法制度（文化芸術基本法、劇場法、文化財保護法、著作権法等）、予算等について学び、文化政策に関する基礎的な知識を修得し、国や地方自治体による具体的な支援政策について学んだ。前期の最終授業は、各学生が異なる自治体の文化振興条例を2つ取りあげ、相違点について分析したものを発表した。

後期の「芸術文化政策論Ⅱ」は、文化政策の観点から公立文化施設ならびに芸術文化団体の運営、文化財の保存活用とまちづくり、芸術分野の教育普及活動、国際交流といったテーマに関して幅広く学んだ。また、欧米、アジア諸国の文化政策について概観し、比較することにより、わが国の文化政策の特徴や方向性について理解を深めた。1年間の総括として、音楽祭/芸術祭または文化財による地域のまちづくりの事例についてプレゼンテーションを行い、国の政策のみならず、地方の文化行政の実情についても学ぶ機会となった。

◆総括

基本的には座学の授業であるが、文化政策についてより身近に感じてもらうため、授業に関連する新聞記事や、インターネット上で話題となっているトピック、近年発行された調査報告書等を活用しながら授業を進めた。また、学生同士で意見交換する場を設けることで、学生の理解と関心を深めることができた。授業後に質問がある場合は、Google Classroomを活用してやり取りを行うようにした。

例年どおり、前期・後期共に、授業内で期末課題のプレゼンテーションを行う機会を設けた。調査内容を整理し発表するとともに、他学生の発表を聞くことで、いろいろな視点から芸術文化政策について考察することができた。また、自身の出身地域の事例や関心のある事例を取りあげることで、より積極的に授業に取り組む姿勢がみられた。

今年度は8名の履修者がいたが、千葉県出身の学生が3名と、山口県出身の学生が2名いたため、地域の文化資源の比較ができ、他の学生に対しても学びが多かった。文化政策についての知見を深めるだけでなく、特定の事例についていろいろな観点から調査し考察することで、次年度の卒業論文のテーマを検討する上でも参考になっていると感じた。

(赤木)

「コンピュータ音楽実習Ⅰ、Ⅱ」

担当教員：安田寿之

■ 概要

一般的な Digital Audio Workstation アプリケーションの一つ「Pro Tools」を使用し、アイデアを具現化し目標とする楽曲形態に到達する制作フローを習得する内容で、ソフトウェアを活用した作編曲技術の習得のみならず、個別の特性に応じた自発的な目標設定、21 世紀型スキル（創造力、イノベーション、情報リテラシー、問題解決能力、協働力など）の獲得もテーマ／目標としている。コンピュータやソフトウェアで何ができるのかを理解することは必要だが、コマンドを暗記するようなことは求めている。むしろ、音楽を通して社会的スキルを身に付けることを重視している。作編曲に創造力やイノベーションが必要なことは言うまでもなく、情報リテラシーにより独自性を追求し、問題解決能力によって課題を打破するとともに同級生と協働し助け合うなど、音楽制作を通して問いに溢れる現代を生きる力を養えると考えている。本コースにも留学生が増える中、国際理解力の素地に繋がることも期待できる。

具体的には、制作ロードマップ（工程表）に則り、進行している。

前期のコンピュータ音楽実習Ⅰでは、デジタルオーディオやソフトウェアの解説をするとともに、全員共通で編曲を進める 1 曲を決定する。ある程度スタンダードとして定着していて多様なアレンジが想定できるか、難易度はどうか、などの観点で選定する。助言はするが、基本的には履修生に選ばせる。今年度は彼らが幼少期に親しんだという教養番組のテーマ曲「青空しんこきゅう」が選定された（私は全く知らない曲であった）。曲を決定後、各自、曲全体の構成、テンポ、拍子、スウィング感、キー、コードなどの基本要素を設定し、MIDI プログラムを進める。

後期のコンピュータ音楽実習Ⅱでは、各自 1 つの楽器をスタジオで録音する工程からスタートし、それらを編集し、前期制作した MIDI プログラムと組み合わせしていく。スタジオでの録音は 2 人ペアで行い、演奏する側と録音する側をそれぞれ担当させる。録音する側はただソフトウェアを操作するだけでなく、演奏を客観的にきき、奏者がどうすれば円滑に演奏できるか考えガイドするコミュニケーション能力を求めている。今年度は 9 人と多めの人数であったが、概ね順調に進めることができた。録音した演奏がプログラムしていたアレンジに影響することも多々あり、編曲のアップデートとミックスを行い完成させる。

模範の意味ではなく、毎年私自身も学生と同じ条件でアレンジを行っている。制作途中での問題や壁をどう乗り越えるかを体現し、具体的な解決策を提示するためである。例えば、直接音には関係ないと思われがちな「整理」が音楽制作においていかに大切で、引いては実際の音に影響する、というようなことを教示している。また、近年の AI の音楽制作への影響は凄まじく、メロディと歌詞を指定することで歌わせることができる AI ソフト(ACE Studio)を使い歌のトラックを制作し紹介した。非常に高品質になっているが、私としては人間味の理由の付けられない魅力を再認識させられる段階である。結果的に、完成曲やツールが学生への刺激になっていれば幸いである。

[前期：コンピュータ音楽実習Ⅰ]

曲構想

曲全体の構成、テンポ、拍子、スウィング感、キー、コードなどの基本要素を構想／設定



MIDI プログラム

- ・リズム MIDI プログラム→audio 化（コミット）
- ・ベース MIDI プログラム→audio 化（コミット）
- ・その他アレンジ楽器（コード、装飾音など） MIDI プログラム→audio 化（コミット）

後期レコーディングする楽器を想定し、その楽器は仮プログラムしておくか（レコーディング後、差し替え）、MIDI プログラムでは避けておく。



[後期：コンピュータ音楽実習Ⅱ]

生楽器（基本的には1楽器）録音・編集

- ・夏休みの間に、楽器決め、アレンジ、練習しておく。（スムーズにレコーディングするため）
- ・スタジオにてレコーディング
ピアノ、ヴォーカルなどなら、そのまま録音。
管楽器、弦楽器、パーカッションなどなら、持参し録音。
- ・編集（テイク選び、クロスフェード、ノイズ除去、スライス、クオンタイズ（タイミング修正）など）



ミックス

- ・エフェクト（EQ／コンプレッサー（必須）、空間系／歪み系／モジュレーション系など（任意））
- ・ミックスダウン（パン、オートメーション、バランス決め）
- ・（マスタリング）



リミックス

部分的もしくは全く違う曲に改変、リアレンジ

■ 2025 年度総括

個々の能力や資質に応じて教えるレッスンの性質が濃い実習のため、人数が多くなると 1 人にかけられるリソースが減るが、今年度は 9 名（1 名は後期から復学）で妥当な配分はできた（参考までに、作曲コースは 15 人で、講義時間内に全員を回りきことは到底できなかった）。それでも、休みがちで個別に説明する必要の出る学生、必須項目をこなしていない学生などへの対応で時間を取られ、例年通り学生作品を持ち帰り自宅でしっかりきき講評する必要に迫られている。均等に個別対応を割り振ると不合格になる学生も出るため、優秀な学生により高度なことを教えられないジレンマも毎年のことである。データのコピーや講評する作業は相応の時間を要するが無給であり、苦しいところでもある。以前は講義時間内でできていたことができなくなっている理由は様々だが、進め方を変える必要も感じる。

今年度の課題曲、「青空しんこきゅう」は履修生が幼少期に親しんだ曲で、服部隆之氏作曲による元々の明るい曲調に加えて、彼ら自身の多幸感も加わった編曲が多かったように思う。

他学科、他コースの講義も担当しており否応なしに比較してしまうが（他では欠席も多く、悪い受講態度（スマホ、居眠り）と課題への取り組み（課題未提出、連絡無視）が際立つ）、アートマネジメントコースの学生は概して素直でまじめで教えやすい。比較的休みも少なくしっかり受講し課題もこなし、安心して進められている。欠席に関して伝えている内容（欠席すると、別の週に個別に説明を受けることになり、他の学生の時間を奪う）を理解し、基本的なことだが大部分は出席している。これも一つの協働力である。このような学生の特性は毎年受け継がれており、今コースの先生がたの指導の賜だと感じる。

（安田）

「演劇論・演出論」

担当教員：酒井 美恵

「演劇論・演出論」は、昨年度まではアートマネジメント専攻4年生を対象として実施していたが、今年度より対象を拡大し、幅広い学科の3・4年生を対象とした前期の選択科目として実施した。今年度は、器楽コース4年生より2名、声楽コース4年生より1名、作曲コース3年生の留学生1名、アートマネジメント専攻4年生より1名、同3年生より2名の計7名が受講した。

前半：演劇に関する基礎知識と演劇史の学習

授業の前半では、演劇界の構造やマネジメント体制についての基礎知識を身につけることを目的に、公共劇場・民間劇場・興行会社・劇団・俳優マネジメント事務所といった主催者の興行形態と、それに伴うマネジメントの違いについて解説した。

初回授業にて受講生に観劇経験を尋ねたところ、1名を除き全員がストレートプレイ（音楽のない演劇）を観た経験がないことが判明したため、課題観劇として新国立劇場で上演されていた三好十郎作／柳沼昭徳演出「夜の道づれ」を指定し、観劇レポートの提出を求めた。レポートでは出演者だけでなく、スタッフの構成・役割にも注目するよう指示し、合わせて作品が描く終戦直後の日本の社会背景についてもディスカッションを行った。戦争の傷跡や喪失感という重いテーマにもかかわらず、学生たちは真摯な姿勢で向き合い、素朴ながらも本質を突く問いを立てており、ストレートプレイが持つ「赤裸々な人間ドラマ」としての力をしっかりと感じ取ってくれたことが印象的であった。

その後、「日本演劇史概論」として演劇スタイルの発展と主要な劇作家・演出家を紹介し、「西洋演劇史概論」ではギリシャ・イタリア・イギリス・フランス・ロシア・ノルウェー・アメリカ・中国の8カ国の演劇史について、重要な人物や劇場、作品を概観した。学生はそれぞれ興味のある国を選び、提示されたキーワードを基にリサーチを行った上で、レポートの提出とプレゼンテーションを実施。これにより、各国における演劇の発展や社会的背景の違いを体系的に学ぶ機会を提供した。

後半：戯曲読解とリーディング実習

授業の後半では、前半で各自が調査した主要国の代表的戯曲の中から、実際に読んでみたい作品を提案してもらう。提案された作品は、「オイディプス王」「二人の主人を一度に持つと」「サロメ」「人形の家」「動物園物語」「シラノ・ド・ベルジュラック」「かもめ」など多岐にわたり、それぞれのあらすじを共有・検討したうえで、最終的にアントン・チェーホフ作『かもめ』を取り上げることとなった。

まず登場人物の関係性や時代背景について解説し、合わせて2018年公開のマイケル・メイヤー監督による映画『かもめ』を事前視聴することで、作品世界の理解を深めた。その後、4幕構成のそれぞれの幕の演出担当を振り分け、稽古日の出席状況に応じてキャスティングを行い、最後、テキストを手にしたリーディング形式での発表を実施した。

受講生の声と成果

受講生からは以下のような感想が寄せられた。

- 「演劇に関して全く知識がなかったので、すべてが新しい学びの連続であり、大人としての教養を身につけられた気がした」
- 「自分とは異なる登場人物を演じることで、他者から見たその人物像と内面のギャップに気づき、自分との意外な共通点を発見することができた」
- 「授業で学んだ‘人とのコミュニケーション・スキル‘が、就職面接の際に大いに役立った」

これらの意見から、演劇という枠を超えて、他者理解やコミュニケーション能力といった面でも学生にとって有意義な学びとなったことが伺え、大変励みになった。半期という限られた時間ではあったが、本授業を通じて、演劇のもつ多様な側面や可能性を体感し、今後も演劇に関心を持って接していくきっかけとなれば幸いである。学生たちの視野が広がり、より豊かな感性と表現力を育んでいく一助となることを心から願っている。

(酒井)



「舞踊概論Ⅰ・Ⅱ」

担当教員：阿部 さとみ

今年度の履修者は1名で、アートマネジメントコースの学生の履修がなかったのが残念でした。同コースの学生にとって本授業の開講曜日は、他の授業がないなどの時間割の関係上、登校日として選ばれにくい条件であったと伺っております。一方で、シラバスの授業内容や到達目標の見せ方・周知の工夫によって、履修の動機づけをより強める余地もあったのではないかと受け止めています。

授業内容は例年同様、神楽・田楽、雅楽、能、狂言、文楽、歌舞伎、日本舞踊と幅広い領域を扱い、画像・映像を多用してそれぞれの特徴と舞踊の多様性、背景にある日本の思想の連続性を学ぶ形式です。音楽大学という点から、日本の音楽が絶対音階を前提としない点にも触れ、必要に応じて制作面・運営面の視点も補足しました。受講生は遠方から通学しており、教育実習と重なって欠席となる回もありましたが、出席時には前向きに取り組み、質問や確認を重ねながら理解を深めていきました。マンツーマンのため、理解度に応じた補足説明や対話を丁寧に行うことができました。

最終的には、各ジャンルの差異と共通点を知り、「難しいから遠い」のではなく「知るほど面白い」という気づきが受講生の中に育ったように感じられました。

6. その他

F D活動

F D (Faculty Development) とは、大学教員の教育能力向上を図る活動であり、公式には「教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組の総称」*と定義されているものである。

(*中央教育審議会「我が国の高等教育の将来像」答申 平成 17 年 1 月)

今年度アートマネジメント部会としては下記の活動を行った。

《実施事項 1》「アートマネジメントコース授業に関する課題」として部会所属教員へのアンケート調査の実施

目的：学生に学ぶ喜びと学修成果をあたえられる望ましい授業のあり方を探求し、各教員の授業改善を図っていくこと。

内容：アートマネジメントコース部会所属の全教員を対象に「アートマネジメントコース授業に関する課題」についてアンケート調査を実施した。今回の調査結果を共有し、大学が実施した「学生による授業評価アンケート」の調査結果とともに、部会において意見交換した。今年度は担当の授業内での学生の学習態度、課題提出等、留学生や多様な学生に対する関わり方、授業運営の向上にあたり取り組まれていることについて討議することとした。

日時：2026 年 2 月 9 日 (月)

- ☐ 回答者：アートマネジメントコース部会所属教員
- ☐ 回答期間：2025 年 12 月 24 日～2026 年 2 月 1 日
- ☐ 回答方法：Google フォーム (記名)
- ☐ 調査対象：原則として、本部会所属教員

備考：「学生による授業評価アンケート」の検証と共に、今回の教員からのアンケート調査を実施し、双方向的に討議することによって授業における現状の把握が具体的に可能となった。また、教員個々の課題の共有や自己点検にも生かすことができた。

《実施事項 2》卒業研究指導方法の検証

目的：音楽総合学科において卒業論文を課している 3 コースが共同で、卒業研究の進め方について学び、各コースの指導法の検証と改善に結び付けること。

内容：音楽学コース、音楽教育コース、アートマネジメントコースの 3 コース合同卒業研究発表会を開催した。

時期：2026 年 3 月 22 日 (ブラームスホール)

備考：音楽総合学科 3 コースそれぞれの卒業研究の発表を聴くことによって、研究テーマの設定や研究成果等について、相互に理解を深めることができた。合同卒業研究発表会は、予定どおり 3 月のオープンキャンパスにおいて開催された。

訃報

本報告書巻頭の「刊行に寄せて」においてもお伝えしておりますとおり、上村英郷コース長がご逝去されました。生前のご尽力に深く感謝申し上げますとともに、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

(中川)

上村英郷先生

本学音楽環境運営学科開設当初より今年度まで、多岐にわたる科目をご担当いただいてまいりました。ことに令和5年度からは、教授として、またアートマネジメントコース長として、さらにアートマネジメント部会長として、本コースを率いてくださっていました。上村先生は、本学大学院を修了された後、ピアノ専攻の教員として本学に奉職され、演奏活動や後進の指導に活躍されておられましたが、音楽環境運営学科の専任教員に転じられ、米国留学や国内留学などを経て、アートマネジメント研究を専門領域とする道を進んでこられました。ピアニストとして育んでこられた音楽に関する豊富な学識と優れた感性は、本コースの教育面においても常に高い信頼を寄せられるところでありました。また、温厚な人柄で学生たちにも慕われており、我々周囲の教員に対しても細やかな気遣いをもって接してこられ、誠実な人柄で人望を集めておられました。

令和7年11月28日（金）に江古田キャンパスにご出勤されていたのを最後に、翌週12月1日（月）の朝から連絡が取れなくなりましたが、12月6日（土）に山梨県甲府市の山中で発見され、死亡が確認されました。登山中の滑落死と伝えられています。

享年 65 歳。

現職のコース長を襲った痛ましい事故は、突然の出来事でもあり、本コースの在校生たちにも大きな精神的衝撃であったことは言うまでもありませんでした。本コースでは、春休み中の2月12日（木）に、教員・在校生全員で「上村先生を偲ぶ会」を催し、生前のご恩に深謝するとともに哀悼の意を捧げました。



武蔵野音楽大学 音楽総合学科 アートマネジメントコース

年間活動報告書 2025

発 行 : 武蔵野音楽大学
音楽総合学科 アートマネジメントコース

編 集 : 武蔵野音楽大学
音楽総合学科 アートマネジメントコース
教員及び担当学生

刊 行 日 : 2026 年 3 月 31 日